

記譜プロジェクト「音と身体の記譜研究」

2022 年度活動報告

2022 年度末、「音と身体の記譜研究」プロジェクトでは「柴田南雄のシアター・ピース考」と題した企画の実施を予定している。

日本の作曲家・柴田南雄（1916-1996）には日本の民俗芸能に取材したシアター・ピースと呼ばれる作品群がある。柴田のシアター・ピースは合唱によって上演されることを意図されているが、一般的な合唱作品とは異なり、多くの作品で不確実性を取り入れた記譜が採用されている。また上演にあたって鍵となるのは、楽譜の表面に書かれた事柄だけでなく、楽譜に書かれていない事柄をどのように読むか（あるいは理解するか）ということである。つまり楽譜の背後にある様々な事柄、とくに取材した民俗芸能のもつ固有の文脈を知らなければ、実際に上演することは難しい。

本企画では、柴田南雄のシアター・ピースを研究し、また自身の作品にも応用している作曲家・徳永崇氏（広島大学大学院准教授）を招き、「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題—記譜されていない情報に着目して—」と題した講演をしていただく予定になっている。講演では柴田のシアター・ピース作品のなかでも日本の民俗芸能に取材した《追分節考》（1973）、《念佛踊》（1976）、および古今東西の恋歌を素材とした《歌垣》（1983）を取り上げて、とくに記譜されていない事柄に注目しながら、上演に内在する様々な問題を考えることになるだろう。当日は講演に先立って「柴田南雄の創作活動とシアター・ピース」と題した筆者の概説、講演後は徳永氏と筆者による座談会も行う予定である。

柴田南雄のシアターピースについては、いずれ実際に作品を上演することを検討しているが、そのためには、やはり段階的な準備が必要となる。本企画はその最初の取り組みという位置づけである。

その他、本研究プロジェクトでは12月にオンラインでの研究会を行い、現在企画中の「記譜法（ノーターション）」に関する冊子（ハンドブック）とその内容に関しての検討を行った。この冊子は、記譜法（ノーターション）の適切な扱いかたを示すガイドとして企画したもので、2023年度ないしは2024年度中の刊行を目指している。また前期中には、本年度中に行った様々な事案について、プロジェクトに関わる非常勤、客員、共同研究員と個別に意見交換を行ったことも記しておく。

報告の最後に、前年度末に行われたワークショップについて簡単に触れておきたい。2022年3月に、本プロジェクトでは「リュート・タブラチュアの記譜法を考える—鳴ると記すのあいまい」と題したワークショップを開催した。ルネサンス期のリュート・タブラチュアを読み解くことをテーマにした本企画には、当該の時代の音楽に携わっている音楽家、研究者、造詣の深い愛好家、学生などおよそ30名が参加した。参加者からは専門的な知識に裏付けされた質問がなされるなど、ワークショップ中やトークセッション後の質疑応答を含めて、充実したワークショップになったといえよう。ワークショップで扱ったリュート・タブラチュアの記譜法をめぐる問題については、当日の講師を務めた古楽演奏家、声楽家の笠原雅仁氏と本プロジェクト共同研究員の三島郁による本号所収の研究ノートを、また実際のワークショップと本学音楽学部教授・岡田加津子（作曲）を交えてのトークセッションの内容については、非常勤研究員の滝奈々子の報告を、それぞれ参照されたい。

竹内 直

柴田南雄のシアター・ピース考

イントロダクション「柴田南雄の創作活動とシアター・ピース」

講師・竹内直（音楽学、芸術資源研究センター非常勤研究員）

講演「柴田南雄のシアター・ピースの上演における諸問題——記譜されていない情報に着目して——」

講師・徳永崇（作曲家、広島大学大学院准教授）

座談会

司会・滝奈々子（芸術資源研究センター非常勤研究員）

2023年3月4日 | 土 |

13:00-16:00 | 12:30 開場 |

会場：京都市立芸術大学大学会館ホール

(ご来場は公共の交通機関をご利用ください)

参加料：無料 (事前予約が必要です)

定員：50名 (一般申し込みは下記のQRコードより申し込みください)



企画主催：京都市立芸術大学芸術資源研究センター「音と身体の記譜研究」プロジェクト

共催：東洋音楽学会西日本支部